

大学受験のとらえ方のタイプによる キャリア選択自己効力感の差異

— 教員養成系大学と非教員養成系大学に所属する大学生を対象として —

堀井 順平
(2020年10月5日受理)

Differences in Career Decision Self-Efficacy by the Type of Personal Perceptions of
University Entrance Examinations
— Students in a teacher versus non-teacher education university —

Junpei Horii

Abstract: This study examined students' career decision self-efficacy (CDSE) as a function of their perceptions of university entrance examinations. Questionnaires were delivered to students enrolled in a teacher education university ($n=259$) and to students enrolled in a non-teacher education university ($n=246$). Subsequent analysis of the resulting data generated four thematic clusters from students enrolled in a teacher education university: "positive," "conflict," "neglect of university entrance examinations," and "negative." Three thematic clusters were extracted from the data for students enrolled in a non-teacher education university: "neglect of university entrance examinations," "negative," and "positive." Next, an analysis of variance was conducted using these clusters as independent variables and the following five factors relevant to CDSE as dependent variables: "self-appraisal," "goal-selecting," "planning," "information-gathering," "autonomy in decision-making." The results showed that students from both types of university who fit into the "positive" cluster scored higher than those in other clusters for "autonomy in decision-making." However, students in the "negative" cluster who enrolled in a teacher education university, and students in the "neglect of university entrance examinations" who enrolled in a non-teacher education university, scored lower than those in the "positive" clusters for "goal-selecting" and "planning." Moreover, students in the "conflict" cluster (i.e., from a teacher education university) scored lower than those in the "positive" cluster for "self-appraisal." These results suggest an important connection between students' perceptions of university entrance examinations and their career development. More specifically, a more positive perception of the examinations seems to correlate with better outcomes in key factors relating to career development.

Key words: Perceptions of University Entrance Examinations, Career Decision Self-Efficacy
キーワード：大学受験のとらえ方，キャリア選択自己効力感

本論文は、課程博士候補論文を構成する論文の一部として以下の審査委員により審査を受けた。

審査委員：児玉真樹子（主任指導教員）、井上 弥、
山内規嗣、藤木大介

問題と目的

大学受験のとらえ方のキャリア形成に対する影響

大学受験は、青年期後期の入り口となるライフイベント

ントであり(中島, 2012), 大学生に共通して重大な過去の経験として挙げられる(堀井, 2017)。これまで、大学生が大学入学後に大学受験の経験をどのようにとらえているかについて検討した研究は数少ない。

その数少ない研究の中で、大学生を対象に大学入学後の大学受験のとらえ方について取り上げた研究として、堀井(2017)が挙げられる。堀井(2017)は、現在という時点で過去をどのようにとらえているかを表す「過去のとらえ方」(石川, 2013)に基づき、「大学受験のとらえ方」を「現時点で、自分の大学受験をどのようにとらえているか」と定義し、大学受験のとらえ方がキャリア形成に及ぼす影響について検討している。堀井(2017)は、キャリアを選択するうえで必要な課題を遂行する能力に対する自信を表す「キャリア選択自己効力感」(Taylor & Betz, 1983)が職業忌避的傾向を抑制し(古市, 1995)、キャリア探索活動を促進する(安達, 2001)など、キャリア形成において一定の効果を示すことから、キャリア選択自己効力感をキャリア形成の指標として取り上げている。そして、堀井(2017)は、過去の経験をとらえ直すことや視点を変えて見直す作業が自己効力感の改善や向上に寄与するという論述(安達, 2006; Chartrand & Rose, 1996; 廣瀬, 1998)から、現時点での過去の経験のとらえ方が自己効力感に影響すると考えられることと、大学受験が高校時代の進路選択の成否を左右する重大なライフイベントであり、大学でのキャリア選択と一定の共通性を有することを踏まえ、大学受験のとらえ方がキャリア選択自己効力感に影響する可能性について言及している。加えて、Bandura(1995 本明・野口訳 1997)の「効力感の強さには、忍耐強い努力によって障害に打ち勝つ体験が要求される」という論述より、大学受験期の努力の程度がキャリア選択自己効力感に影響する可能性についても言及している。

以上の点を踏まえ、堀井(2017)は、教員養成系大学に所属する大学1, 2年生を対象として、大学受験のとらえ方尺度を作成したところ、5因子を抽出し、石川(2013)と同様の命名をしている。その5因子のうち、「連続的なとらえ」と「受容的態度」が肯定的な因子を、「否定的態度」と「否定的認識」が否定的な因子を、「わりきり態度」が肯定的でも否定的でもない因子をそれぞれ表す。そのうえで、大学受験のとらえ方と大学受験期の努力の程度の組み合わせのタイプによるキャリア選択自己効力感の差異について検討している。なお、キャリア選択自己効力感尺度については、花井(2008)の尺度を使用し、「自己評価」、「目標選択」、「計画立案」、「情報収集」、「意思決定の主体性度」の5下位尺度で構成されている。まず、大学受

験のとらえ方と大学受験期の努力の程度の組み合わせとして、以下の4タイプを抽出している。すなわち、入学後に大学受験を肯定的にとらえており、大学受験期の努力も積極的であった「肯定・積極」タイプ、入学後に大学受験をやや肯定的にとらえており、大学受験期の努力が消極的な傾向にあった「半肯定・消極傾向」タイプ、入学後に大学受験を否定的にとらえており、大学受験期の努力が消極的であった「否定・消極」タイプ、入学後に大学受験を無意味な経験としてわりきってとらえており、大学受験期の努力が非常に消極的であった「大学受験無関心」タイプの4タイプである。そして、これら4タイプ間におけるキャリア選択自己効力感の差異について検討したところ、「目標選択」と「意思決定の主体性度」において、「肯定・積極」タイプが「否定・消極」タイプよりも有意に得点が高いことを明らかにしている。加えて「意思決定の主体性度」において、「大学受験無関心」タイプが他の3タイプよりも有意に得点が高いことを明らかにしている。これらの結果より、大学受験期に受験勉強に積極的に取り組み、努力することや、大学入学後に大学受験を否定的にとらえている学生や無意味な経験としてわりきってとらえている学生が、その経験を肯定的にとらえ直すことは、一部のキャリア選択自己効力感の改善や向上につながることを示唆されている。特に、大学受験のとらえ方は、その定義から、入学後の大学生活の中でも変容する可能性がある(堀井, 2017)ため、大学受験のとらえ方が否定的な学生を対象に、より肯定的なとらえ方に変化するよう周囲が働きかけることがキャリア形成支援につながることも考えられ、着目する意義は大きいといえる。

大学生のキャリア形成に対する大学受験のとらえ方の影響についての未解明な点

しかし、これまで、大学生のキャリア形成に対する大学受験のとらえ方の影響に着目した研究では、所属先の学部等による、大学受験のとらえ方のキャリア形成に対する影響の差異が検討されていない。堀井(2017)では、教員養成系大学に所属する大学生(以下、教員養成系学生とする)を対象としているが、このような学生は、大学進学時点で教職という特定の職業を選択していると想定され、大学入学後にキャリア選択自己効力感を向上させる必要性は限定的であると考えられる。一方、特に何らかの免許(例えば教員免許、医師免許など)の受験資格取得を卒業要件としていない学部(以下、非教員養成系学生とする)は、教員養成系学生とは異なり、大学進学時点で特定の職業を選択しておらず、本格的なキャリア選択は大学生活の後半に行われると考えられるた

め、大学入学後にキャリア選択自己効力感を向上させる必要性が大きいと考えられる。しかし、非教員養成系学生を対象として、大学受験のとらえ方がキャリア形成に及ぼす影響について検討した研究は見当たらない。そこで、大学受験のとらえ方のタイプによるキャリア選択自己効力感の下位尺度の差異の検討について、教員養成系学生と非教員養成系学生のそれぞれを対象とする。そして、大学受験のとらえ方とキャリア選択自己効力感との関係について、教員養成系学生と非教員養成系学生とで比較する。

本研究の目的

以上より、本研究では、教員養成系学生と非教員養成系学生のそれぞれを対象として、大学受験のとらえ方のタイプによるキャリア選択自己効力感の差異について検討することを目的とする。双方の大学生の大学受験のとらえ方のタイプによるキャリア選択自己効力感の差異を明らかにすることにより、教員養成系学生および非教員養成系学生のキャリア形成における、大学受験のとらえ直しの重要性についての示唆を得る。

方 法

分析対象者と調査手続き

教員養成系学生については、2015年12月から2016年2月に調査を実施し、堀井(2017, 2019)と同一の259名(1年生111名, 2年生148名)を分析対象とした。非教員養成系学生については、2018年7月に愛知県内の1私立大学の2年生107名, 2019年7月に広島県内の1公立大学の1, 2年生150名(1年生120名, 2年生30名)の合計257名に調査を実施し、欠損値のない246名(1年生114名, 2年生132名)を分析対象とした。

いずれにおいても、講義時間の一部を使用し、質問紙調査が実施された。質問紙調査の実施に当たっては、「この調査は、コンピュータにデータ入力後、シュレッダーにて処分するなど、個人情報の保護に最大限の考慮をいたします。そのため、個人の情報や回答内容が特定されたり、外部に漏れたりすることは一切ありません」と教示し、倫理的配慮を行った。また、回答は任意である旨も書面および口頭で伝えた。

調査内容

1. 大学受験のとらえ方: 堀井(2017)の大学受験のとらえ方尺度を使用した。本尺度は「連続的なとらえ」8項目、「否定的態度」3項目、「受容的態度」3項目、「わりきり態度」4項目、「否定的認識」6項目の合計24項目より構成されている。「連続的なとらえ」は、大学受験を自分の成長や現在および未来につな

る経験としてとらえていることを表し、その項目例として「大学受験は自分を成長させてくれた」や「大学受験での出来事は、これからにつながると思う」がある。「否定的態度」は、大学受験に対する後悔を表し、その項目例として「大学受験に後悔している」や「大学受験を引きずっている」がある。「受容的態度」は、大学受験に対する受容的なとらえ方を表し、その項目例として「大学受験での出来事すべてに意味があると思っている」や「大学受験をふり返ることは大切なことであると思う」がある。「わりきり態度」は、大学受験を忘れるあるいは忘れようとすることを表し、その項目例として「大学受験でのマイナスな出来事は忘れてしまうことが多い」や「大学受験のことはあまり覚えていない」がある。「否定的認識」は、大学受験に対する否定的な認識を表し、その項目例として「自分の大学受験はマイナスな出来事ばかりだった」や「大学受験は否定的なイメージである」がある。自分の大学受験の経験について尋ねている各項目が、今現在の自分の考えにどの程度あてはまると思うのかについて、「1. 全くあてはまらない」から「5. とてもあてはまる」の5段階評定での回答を求めた。

2. キャリア選択自己効力感: 花井(2008)のキャリア選択自己効力感尺度を使用した。本尺度は「自己評価」、「目標選択」、「計画立案」、「情報収集」、「意思決定の主体性度」の各5項目、合計25項目より構成されている。「自己評価」は自己を理解・評価することへの自己効力感を表し、その項目例として「自分の性格を理解すること」や「仕事をするうえでの自分の長所と短所を理解すること」がある。「目標選択」は将来の目標を明確にすることへの自己効力感を表し、その項目例として「将来、なりたい自分を明確にすること」や「仕事に対する自分の興味を理解すること」がある。「計画立案」は将来への計画を立てることへの自己効力感を表し、その項目例として「就職活動について具体的な計画を立てること」や「将来のために今やっておくべきことの計画を立てること」がある。「情報収集」は職業情報を収集することへの自己効力感を表し、その項目例として「自分の職業選択に必要な情報を得るために、新聞・テレビなどのマスメディアを利用すること」や「職業情報を得るために、インターネットを利用すること」がある。「意思決定の主体性度」は目標とする職業に対する粘り強い努力に対する自己効力感を表し、その項目例として「就きたい職業に就けるのであれば、少々の苦勞でも我慢すること」や「本当に好きな職業に就くためなら、努力を惜しまないこと」がある。キャリア選択に必要な行動を表す各項目の事柄を行うことにどの程度自信があるのかに

ついて、「1. 自信がない」から「4. 自信がある」の4段階評定での回答を求めた。

3. その他：性別、学年、入学した大学が第1志望か否かについて尋ねた。

結果

教員養成系学生と非教員養成系学生における大学受験のとりえ方およびキャリア選択自己効力感の各下位尺度の基礎統計量

まず、教員養成系学生と非教員養成系学生のそれぞれにおける、大学受験のとりえ方およびキャリア選択自己効力感の各下位尺度の平均値、標準偏差、 α 係数、相関係数を算出したところ、Table 1のとおりとなった。教員養成系学生と非教員養成系学生それぞれの「わりきり態度」について、 α 係数がそれぞれ.69、.64と十分な値ではないものの、許容できる範囲と判断し、以降の分析においても使用した。

教員養成系学生と非教員養成系学生における大学受験のとりえ方のタイプ

次に、教員養成系学生と非教員養成系学生それぞれにおける大学受験のとりえ方のタイプを抽出するため、大学受験のとりえ方尺度の下位尺度を投入変数としてクラスター分析（Ward法・平方ユークリッド距離）を行った。

これまで、大学受験のとりえ方と大学受験期の努力の程度の組み合わせや、過去のとりえ方をクラスター分析によってタイプに分類した研究（堀井、2017；石川、2014）では、いずれも4タイプが抽出されている。そこで、教員養成系学生を対象に、クラスター数を4に指定してクラスター分析を行ったところ、Figure 1のとおりとなった。続いて、抽出された4群を独立変

数、大学受験のとりえ方の下位尺度を従属変数として1要因分散分析を行ったところ、Table 2のとおりとなり、全ての下位尺度において、タイプ間に有意差が認められた。各タイプの特徴と命名は以下のとおりである。

第1群は、「連続的などらえ」と「受容的態度」の得点が4群の中で最も高く、その他の下位尺度の得点が低いことから、大学受験を肯定的にとらえているタイプといえるため、「肯定」タイプと命名された。第2群は、「連続的などらえ」や「受容的態度」の得点や「否定的認識」の得点が高く、「わりきり態度」の得点も高かった。また、「否定的態度」の得点は高くはないものの、4群中2番目の高さであり、相対的には高いといえる。これらのことから、第2群は、大学受験のとりえ方の肯定的な側面と否定的な側面とわりきってとらえる側面とが混在しており、各側面が葛藤していることから、「葛藤」タイプと命名された。第3群は、「わりきり態度」の得点が標準より少し高い程度であるが、その他の下位尺度が低いことから、大学受験を軽視してとらえているタイプといえるため、「大学受験軽視」タイプと命名された。第4群は、「否定的態度」と「否定的認識」の得点が4群の中で最も高く、「連続的などらえ」と「受容的態度」の得点が低かった。また、「わりきり態度」の得点がやや高かったものの、総じて、第4群は大学受験を否定的にとらえているタイプといえるため、「否定」タイプと命名された。

同様に、非教員養成系学生を対象に、クラスター数を4に指定してクラスター分析を行ったが、4群中2群で、本研究の教員養成系学生とは異なる特徴を示した。そこで、クラスター数を3に指定してクラスター分析を行ったところ、Figure 2のとおりとなった。続

Table 1 各変数の基礎統計量

| | 教員養成系学生 | | | 非教員養成系学生 | | | とりえ方 | | | | | | | | | |
|-------------|---------|------|----------|----------|------|----------|---------|---------|---------|---------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|
| | M | SD | α | M | SD | α | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 |
| 1 連続的などらえ | 3.72 | 0.78 | .89 | 3.58 | 0.80 | .89 | - | -.09 | .73*** | -.13* | -.15* | .22*** | .23*** | .24*** | .21** | .37*** |
| 2 否定的態度 | 2.24 | 1.05 | .84 | 2.59 | 1.13 | .82 | -.25*** | - | .01 | -.12† | .63*** | -.03 | .01 | .06 | -.03 | -.02 |
| 3 受容的態度 | 3.28 | 0.86 | .75 | 3.36 | 0.92 | .73 | .63*** | -.18** | - | -.28*** | -.05 | .19** | .24*** | .24*** | .14* | .34*** |
| 4 わりきり態度 | 2.71 | 0.70 | .69 | 2.69 | 0.78 | .64 | -.17** | -.11 | -.20*** | - | .09 | -.05 | -.06 | -.01 | .03 | -.14* |
| 5 否定的認識 | 2.37 | 0.77 | .82 | 2.49 | 0.88 | .85 | -.09 | .48*** | -.02 | .04 | - | -.08 | -.09 | -.08 | -.06 | -.12† |
| 6 自己評価 | 2.82 | 0.55 | .83 | 2.83 | 0.55 | .85 | .12 | -.13* | .08 | -.14* | -.12 | - | .49*** | .36*** | .38*** | .45*** |
| 7 目標選択 | 2.56 | 0.77 | .91 | 2.48 | 0.67 | .87 | .17** | -.21*** | .19** | -.10 | -.17** | .32*** | - | .69*** | .52*** | .53*** |
| 8 計画立案 | 2.10 | 0.64 | .90 | 2.23 | 0.63 | .90 | .11 | -.02 | .15* | -.20** | -.06 | .25*** | .54*** | - | .60*** | .56*** |
| 9 情報収集 | 2.53 | 0.62 | .88 | 2.69 | 0.61 | .88 | .03 | .00 | .11 | .01 | .06 | .22*** | .36*** | .53*** | - | .49*** |
| 10 意思決定の主体性 | 3.02 | 0.63 | .92 | 2.87 | 0.63 | .91 | .25*** | -.25*** | .29*** | -.07 | -.17** | .30*** | .54*** | .38*** | .34*** | - |

注1. 「とりえ方」は大学受験のとりえ方、「CDSE」はキャリア選択自己効力感を表す。

注2. 左下段は教員養成系学生の、右上段は非教員養成系学生の結果をそれぞれ示す。

† $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

大学受験のとらえ方のタイプによるキャリア選択自己効力感の差異
 — 教員養成系大学と非教員養成系大学に所属する大学生を対象として —

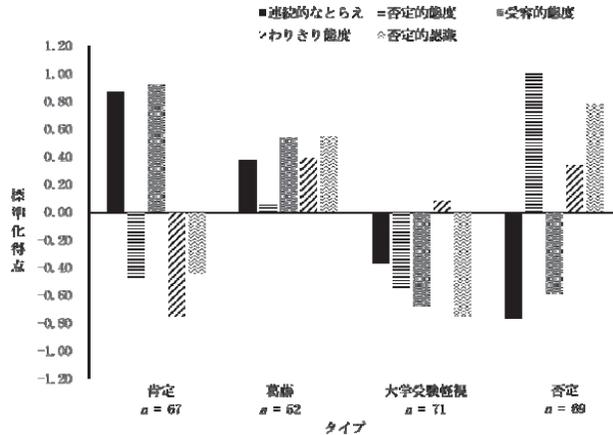


Figure 1 教員養成系学生における大学受験のとらえ方の4タイプ

Table 2 教員養成系学生の各タイプにおける大学受験のとらえ方の下位尺度の平均値 (SD) と分散分析の結果

| | 1. 肯定 n = 67 M (SD) | 2. 葛藤 n = 52 M (SD) | 3. 大学受験軽視 n = 71 M (SD) | 4. 否定 n = 69 M (SD) | F値 (3, 255) | 多重比較 |
|---------|---------------------------|---------------------------|-------------------------------|---------------------------|-------------|---------------|
| 連続的などらえ | 4.40 (0.44) | 4.02 (0.42) | 3.43 (0.74) | 3.12 (0.68) | 61.03*** | 4 < 3 < 2 < 1 |
| 否定的態度 | 1.73 (0.84) | 2.29 (0.65) | 1.66 (0.60) | 3.30 (1.03) | 61.65*** | 1, 3 < 2 < 4 |
| 受容的態度 | 4.07 (0.57) | 3.74 (0.51) | 2.70 (0.73) | 2.78 (0.61) | 82.76*** | 3, 4 < 2 < 1 |
| わりきり態度 | 2.18 (0.56) | 2.98 (0.56) | 2.77 (0.60) | 2.95 (0.76) | 22.31*** | 1 < 2, 3, 4 |
| 否定的認識 | 2.03 (0.51) | 2.79 (0.46) | 1.79 (0.51) | 2.97 (0.78) | 63.15*** | 3 < 1 < 2, 4 |

*** $p < .001$

いて、抽出された3群を独立変数、大学受験のとらえ方の下位尺度を従属変数として1要因分散分析を行ったところ、Table 3のとおりとなり、全ての下位尺度において、タイプ間に有意差が認められた。各タイプの特徴と命名は以下のとおりである。

第1群は、「わりきり態度」の得点のみ高く、他の下位尺度の得点が低かったことから、大学受験を軽視してとらえているタイプといえるため、「大学受験軽視」タイプと命名された。第2群は、「否定的態度」と「否定的認識」の得点が最も高いことから、大学受験を否定的にとらえているタイプといえるため、「否定」タイプと命名された。第3群は、「連続的などらえ」と「受容的態度」の得点が最も高く、その他の下位尺度の得点が低いことから、大学受験を肯定的にとらえているタイプといえるため、「肯定」タイプと命名された。

なお、補足的に、大学受験のとらえ方の4群の人数と入学した大学が第1志望か否かの人数との割合に偏りが見られるか否かについて検討するために、 χ^2 検定を行ったところ、Table 4のとおりとなり、教員養成系学生と非教員養成系学生の双方で有意であった（順に、 $\chi^2(3) = 20.64, p < .001$; $\chi^2(2) = 16.09, p < .001$ ）。残差分析の結果、教員養成系学生と非教員養成系学生

の双方の「否定」タイプでのみ、入学した大学が第1志望の学生の人数の割合が有意に低く、入学した大学が第1志望ではない学生の人数の割合が有意に高かった。

大学受験のとらえ方のタイプによるキャリア選択自己効力感の差異

続いて、大学受験のとらえ方のタイプによるキャリア選択自己効力感の差異について検討するため、教員養成系学生と非教員養成系学生のそれぞれを対象として、大学受験のとらえ方のタイプを独立変数、キャリア選択自己効力感の下位尺度を従属変数として1要因分散分析を行ったところ、Table 5のとおりとなった。教員養成系学生について、「肯定」タイプは「葛藤」タイプよりも「自己評価」の得点が高く、「否定」タイプよりも「計画立案」の得点が高かった。加えて、「肯定」タイプは「葛藤」タイプと「否定」タイプよりも「目標選択」の得点が高く、他の3群よりも「意思決定の主体性度」の得点が高かった。次に、非教員養成系学生について、「肯定」タイプは「大学受験軽視」タイプよりも「目標選択」と「計画立案」の得点が高く、「大学受験軽視タイプ」と「否定」タイプよりも「意思決定の主体性度」の得点が高かった。

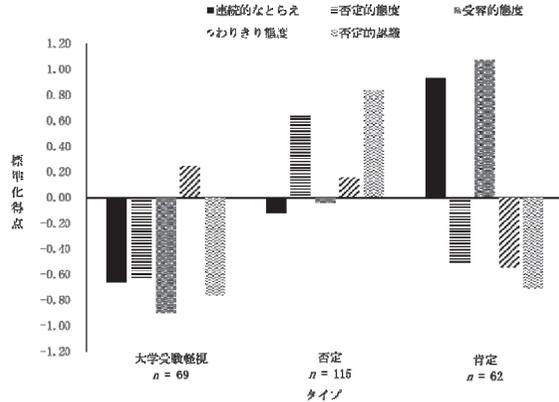


Figure 2 非教員養成系学生における大学受験のとらえ方の3タイプ

Table 3 非教員養成系学生の各タイプにおける大学受験のとらえ方の下位尺度の平均値 (SD) と分散分析の結果

| | 1. 大学受験軽視 n = 69 | 2. 否定 n = 115 | 3. 肯定 n = 62 | F値(2, 243) | 多重比較 |
|---------|---------------------|------------------|-----------------|------------|-----------|
| | M (SD) | M (SD) | M (SD) | | |
| 連続的などらえ | 3.05 (0.75) | 3.49 (0.67) | 4.33 (0.45) | 65.60*** | 1 < 2 < 3 |
| 否定的態度 | 1.90 (0.88) | 3.32 (0.96) | 2.02 (0.80) | 70.66*** | 1, 3 < 2 |
| 受容的態度 | 2.53 (0.75) | 3.32 (0.64) | 4.34 (0.49) | 132.36*** | 1 < 2 < 3 |
| わりきり態度 | 2.88 (0.74) | 2.81 (0.83) | 2.27 (0.53) | 13.81*** | 3 < 1, 2 |
| 否定的認識 | 1.82 (0.46) | 3.22 (0.63) | 1.87 (0.51) | 187.38*** | 1, 3 < 2 |

***p < .001

Table 4 大学受験のとらえ方の4タイプにおける入学した大学が第1志望か否かの人数 (そのタイプにおける比率)

| | 教員養成系学生 | | | | 非教員養成系学生 | | |
|-------|-----------------|-----------------|-------------------------|-----------------|-------------------------|------------------|-----------------|
| | 1. 肯定 n = 67 | 2. 葛藤 n = 52 | 3. 大学受験 軽視 n = 71 | 4. 否定 n = 69 | 1. 大学受験 軽視 n = 69 | 2. 否定 n = 115 | 3. 肯定 n = 62 |
| 第1志望 | 51 (76) | 39 (75) | 58 (82) | 34 (49)* | 46 (67) | 44 (38)* | 37 (60) |
| 非第1志望 | 16 (24) | 13 (25) | 13 (18) | 35 (51)* | 23 (33) | 71 (62)* | 25 (40) |

*p < .05

Table 5 大学受験のとらえ方の4タイプを独立変数、キャリア選択自己効力感の下位尺度を従属変数とした1要因分散分析の結果

| | 教員養成系学生 | | | | F値(3, 255) | 多重比較 | 非教員養成系学生 | | | F値(2, 243) | 多重比較 |
|---------------|-----------------|-----------------|-------------------------|-----------------|------------|-------------|-------------------------|------------------|-----------------|------------|----------|
| | 1. 肯定 n = 67 | 2. 葛藤 n = 52 | 3. 大学受験 軽視 n = 71 | 4. 否定 n = 69 | | | 1. 大学受験 軽視 n = 69 | 2. 否定 n = 115 | 3. 肯定 n = 62 | | |
| | M (SD) | M (SD) | M (SD) | M (SD) | | | M (SD) | M (SD) | M (SD) | | |
| 自己評価 | 2.96 (0.59) | 2.66 (0.44) | 2.83 (0.57) | 2.79 (0.57) | 2.94* | 2 < 1 | 2.81 (0.56) | 2.78 (0.52) | 2.95 (0.57) | 2.03 | |
| 目標選択 | 2.83 (0.74) | 2.42 (0.66) | 2.57 (0.84) | 2.41 (0.75) | 4.43** | 2, 4 < 1 | 2.37 (0.66) | 2.46 (0.65) | 2.66 (0.69) | 3.44* | 1 < 3 |
| 計画立案 | 2.28 (0.68) | 2.14 (0.58) | 2.04 (0.60) | 1.94 (0.64) | 3.54* | 4 < 1 | 2.06 (0.60) | 2.24 (0.58) | 2.38 (0.70) | 4.54* | 1 < 3 |
| 情報収集 | 2.67 (0.63) | 2.44 (0.59) | 2.46 (0.62) | 2.55 (0.64) | 1.83 | | 2.59 (0.62) | 2.70 (0.55) | 2.77 (0.69) | 1.57 | |
| 意思決定の 主体性度 | 3.27 (0.48) | 2.88 (0.59) | 3.00 (0.74) | 2.89 (0.61) | 5.83*** | 2, 3, 4 < 1 | 2.67 (0.65) | 2.83 (0.59) | 3.17 (0.57) | 12.05*** | 1, 2 < 3 |

*p < .05, **p < .01, ***p < .001

考 察

本研究は、教員養成系学生と非教員養成系学生それぞれを対象として、大学受験のとらえ方のタイプによるキャリア選択自己効力感の差異について検討することを目的とした。

教員養成系学生と非教員養成系学生の大学受験のとらえ方タイプの同質性

まず、教員養成系学生と非教員養成系学生のそれぞれについて、大学受験のとらえ方のタイプを抽出するために、大学受験のとらえ方の下位尺度を投入変数としてクラスター分析を行った。教員養成系学生については Figure 1 と Table 2 のとおりとなり、以下の特徴を示す 4 群が抽出された。すなわち、大学受験のとらえ方が肯定的な「肯定」タイプ、大学受験のとらえ方の肯定的な側面と否定的な側面とわりきってとらえる側面とが混在している「葛藤」タイプ、大学受験を軽視してとらえている「大学受験軽視」タイプ、大学受験を否定的にとらえている「否定」タイプの 4 群が抽出された。一方、非教員養成系学生については Figure 2 と Table 3 のとおりとなり、以下の特徴を示す 3 群が抽出された。すなわち、大学受験を軽視してとらえている「大学受験軽視」タイプ、大学受験を否定的にとらえている「否定」タイプ、大学受験を肯定的にとらえている「肯定」タイプの 3 群が抽出された。

教員養成系学生と非教員養成系学生の双方に共通して、大学受験を肯定的にとらえている「肯定」タイプが抽出された。このタイプは、教員養成系学生か非教員養成系学生かにかかわらず、大学受験のとらえ方の特徴として（若干、教員養成系学生が非教員養成系学生よりも「否定的態度」と「わりきり態度」が低く、「否定的認識」が高いという違いはあるものの）、概ね「連続的なとらえ」と「受容的態度」が高く、その他の因子が低かった。また、双方の大学生において、大学受験を軽視してとらえている「大学受験軽視」タイプが抽出された。このタイプは、教員養成系学生か非教員養成系学生かにかかわらず、大学受験のとらえ方の特徴として（若干、教員養成系学生が非教員養成系学生よりも「連続的なとらえ」と「受容的態度」が高く、「否定的態度」が低いという違いがあるものの）、概ね「わりきり態度」のみ高く、その他の因子が低かった。2 つの系統の大学に共通して、大学受験を肯定的にとらえている大学生や軽視してとらえている大学生の存在が確認された。

さらに、双方の大学生において、大学受験を否定的にとらえている「否定」タイプが抽出された。ただし、所属する大学によって「否定」タイプの大学受験のと

らえ方の肯定的な側面に異なる特徴が示され、教員養成系学生の「否定」タイプは非教員養成系学生の「否定」タイプと比較すると、大学受験のとらえ方の肯定的な側面が低かった。一方、堀井（2019）より、大学受験のとらえ方が否定的な大学生の特徴の 1 つとして、入学した大学が第 1 志望ではないことが考えられる。実際に、Table 4 より、双方の大学生における「否定」タイプは他のタイプに比べ、入学した大学が第 1 志望ではない学生の人数の割合が最も高かった。また、所属先ごとに「否定」タイプにおける入学した大学が第 1 志望か否かの人数の割合を見たところ、所属先が教員養成系大学ではほぼ同じ、非教員養成系大学では第 1 志望ではない学生の方が高かった。これらの点より、同じ「否定」タイプでも、教員養成系大学は、非教員養成系大学よりも第 1 志望ではない学生の人数の割合が低いことから、大学受験のとらえ方の肯定的な側面が相対的に高いことが予想されるが、Figure 1 および Figure 2 に示された結果はその逆を示していた。このような結果となったのはなぜだろうか。この理由として、教員養成系大学は教職という大学卒業後の進路の選択と密接に関係することにあるのではなかろうか。教員養成系大学の「否定」タイプに含まれる学生の約半分に当たる非第 1 志望で入学した学生は、教職という特定の職業を不本意ながら選択している可能性が高い。しかし、教員養成系大学では、大学生が大学卒業後に教職に就くことを前提としてカリキュラムが組まれており、卒業後の進路の選択肢が限られている。そのため、教職という特定の職業を不本意ながら選択した大学生は、今後の進路に関して否定的な想いを抱いているだろう。よって、大学受験を現在の生活や未来につながる有意義な経験として肯定的にとらえることが困難であると考えられる。一方、所属先が非教員養成系大学の場合、教員養成系大学ほど、特定の職業に就くことを目的として大学のカリキュラムは組まれていない。非教員養成系学生にとっては、たとえ第 1 志望の大学に進学しなかったとしても、教員養成系学生よりも卒業後の進路の選択肢が多いため、「大学受験の経験は現在の大学生活や未来と全くつながっていないわけではなく、無意味ではなかった」など、多少なりとも肯定的にとらえられる可能性が考えられる。

なお、教員養成系学生にて抽出された「葛藤」タイプに対応するタイプは、非教員養成系学生では抽出されなかった。Table 4 より、「葛藤」タイプの人数の割合について、入学した大学が第 1 志望の学生は第 1 志望ではない学生よりも高かった。また、若松（2012）は、教員養成課程に所属し、大学入学後に教職志望意識が低下する大学生が一定数存在することを見出して

いる。これらの点を踏まえると、入学した大学が第1志望であっても、その後教職志望意識が低下する場合、大学受験期に暫定的ではあるが教職という特定の職業を選択したが故に、今後もその進路を進み続けるか否かに関して葛藤が生じる可能性がある。このような葛藤が大学受験のとらえ方の複数の側面の葛藤として反映されているのかもしれない。ただし、入学した大学が第1志望ではない学生も少数ながら存在することに留意する必要がある。すなわち、不本意ながら教員養成系大学に進学したが、次第に教職という卒業後の進路を受容する可能性もある。この場合、入学当初は教職を目指すつもりはなく、第1志望の大学に進学しなかったため、「否定」タイプと同じく大学受験を否定的にとらえる傾向にある。しかし、Figure 1より、「葛藤」タイプは「否定」タイプよりも「連続的にとらえ」と「受容的態度」が高く、「否定的態度」が低いことから、教職を卒業後の進路として受容するにしがたい、大学受験に対する後悔が緩和され、大学受験を今後の進路につながる有意な経験として肯定的にもとらえられるようになる可能性がある。その結果が、大学受験のとらえ方の複数の側面の葛藤として反映されているのかもしれない。一方、非教員養成系学生の場合、特定の職業に就くことを目的として大学に進学した大学生は多くないと考えられ、上記のような葛藤は生じにくいと、大学受験のとらえ方の複数の側面が葛藤するタイプが抽出されなかったと考えられる。

以上より、大学受験を肯定的にとらえているタイプ、軽視してとらえているタイプについては、教員養成系学生と非教員養成系学生とで概ね対応関係が認められたため、実質的に同質であるといえる。ただし、「葛藤」タイプは教員養成系学生においてのみ抽出されたこと、「否定」タイプの特徴は大学によって異なることなど、双方の大学生の間で大学受験のとらえ方のタイプに若干異なる部分も認められた。

大学受験のとらえ方のタイプによるキャリア選択自己効力感の差異

教員養成系学生の場合 続いて、教員養成系学生を対象として、大学受験のとらえ方の4タイプを独立変数、キャリア選択自己効力感尺度の下位尺度を従属変数として1要因分散分析を行ったところ、Table 5のとおりとなった。

まず、「肯定」タイプは他の3タイプよりも、「意思決定の主体性度」の得点が有意に高かった。「肯定」タイプに属する大学生は、大学受験を自分の成長や現在および未来につながる有意な経験として肯定的にとらえている。このように大学受験の経験を自分の糧にしている場合、「大学受験の経験を活かして自分を

成長させていこう」「大学受験の経験をバネに将来に向けて頑張ろう」など、自分の成長や未来に対する意欲も高く、このような意欲が今後の目標に向けた粘り強い努力に対する自己効力感の高さに反映されていると考えられる。

また、「葛藤」タイプは「肯定」タイプよりも、「意思決定の主体性度」に加え、「自己評価」と「目標選択」の得点が有意に低かった。先述の通り、「葛藤」タイプに属する大学生は、今後も教職の進路を進み続けることに葛藤を抱いている可能性がある。よって、「葛藤」タイプに属する大学生は、自分自身の適性等について理解することや、教職のような将来の目標を明確にすることに關する自己効力感を持つことが困難であると考えられる。

さらに、「否定」タイプは「肯定」タイプよりも、「意思決定の主体性度」に加え、「目標選択」と「計画立案」の得点が有意に低かった。先述の通り、「否定」タイプに属する大学生は、既に選択した教職という職業が不本意であり、今後の進路に関して否定的であるため、将来に不安を抱えることが考えられる。そして、このような将来への不安が、将来の目標を明確にし、その目標に向けて計画を立てることに關する自己効力感の低さに反映されるため、「否定」タイプに属する大学生は、「目標選択」や「計画立案」の得点が低かったと考えられる。

非教員養成系学生の場合 次に、非教員養成系学生を対象として、大学受験のとらえ方の3タイプを独立変数、キャリア選択自己効力感尺度の下位尺度を従属変数として1要因分散分析を行ったところ、Table 5のとおりとなった。

まず、「肯定」タイプは他の2タイプよりも、「意思決定の主体性度」の得点が有意に高かった。教員養成系学生と同様に、「肯定」タイプに属する大学生は、大学受験を自分の成長や現在および未来につながる有意な経験としてとらえている。このように、大学受験の経験を自分の糧にしている場合、自分の成長や未来に対する意欲も高く、このような意欲が今後の目標に向けた粘り強い努力に対する自己効力感の高さに反映されていると考えられる。

また、「大学受験軽視」タイプは「肯定」タイプよりも、「意思決定の主体性度」に加え、「目標選択」と「計画立案」の得点が有意に低かった。Figure 2より、「大学受験軽視」タイプは大学受験を肯定的にも否定的にもとらえていない。しかし、Table 1より、非教員養成系学生の場合、主に、大学受験のとらえ方の肯定的な側面がキャリア選択自己効力感と有意な正の相関関係を示しており、大学受験を自分の成長や現在お

よび未来につながる有意な経験として肯定的にとらえられることがキャリア選択自己効力感と関連するといえる。これらの点を踏まえると、大学受験を軽視してとらえている大学生は、肯定的にとらえることが困難であるため、キャリア選択自己効力感が低いと考えられる。加えて、大学生を対象に、過去のとらえ方の4タイプによる将来目標意識の差異について検討した石川(2014)においては、過去を軽視してとらえている大学生は、肯定的にとらえている大学生よりも、将来目標を持っていると感じている程度が低いことが明らかにされている。この点についても併せると、大学受験のような過去の経験を軽視してとらえている大学生は、将来の目標を持ちにくく、そのような目標を明確にし、それに向けて計画を立てることにする自己効力感を持つことが困難であると考えられる。

教員養成系学生と非教員養成系学生の比較 以上より、教員養成系学生と非教員養成系学生の双方に共通して、大学受験を肯定的にとらえているタイプが他の全てのタイプよりも「意思決定の主体性度」の得点が有意に高かった。このことから、所属先の大学が教員養成系か否かにかかわらず、入学後に大学受験を肯定的にとらえている大学生は、目標とする職業に対する粘り強い努力に関する自己効力感を有していることが明らかになった。

また、双方の大学生に共通して、「情報収集」の得点にタイプ間で有意差が認められなかった。「情報収集」は職業情報を収集することへの自己効力感を表す。しかし、「目標選択」や「計画立案」のような将来への不安の低さや「意思決定の主体性度」のような自分の成長や未来に対する意欲の高さではなく、「情報収集」は「職業情報を得るために、インターネットを利用すること」などの具体的なスキルに対する自己効力感を反映していると考えられる。教員養成系学生か非教員養成系学生かを問わず、大学受験の経験を肯定的にとらえていることは、職業情報の収集のような具体的なスキルに対する自己効力感には直接的に結びつかないのかもしれない。

さらに、双方の大学生ともに、大学受験を肯定的にとらえているタイプが他のタイプのいずれかよりも「目標選択」と「計画立案」の得点が有意に高かった。しかし、「目標選択」と「計画立案」の得点に有意差が認められたタイプに双方の大学生で違いが見られた。すなわち、「目標選択」と「計画立案」の得点について、教員養成系学生では「否定」タイプが、非教員養成系学生では「大学受験軽視」タイプが「肯定」タイプよりも有意に低かった。これらの点については、以下のような解釈が可能である。

非教員養成系学生とは異なり、教員養成系学生における「否定」タイプは、大学受験のとらえ方の肯定的な側面が低いことから、大学受験を否定的にとらえているのみならず、現在の生活や未来につながる無意味な経験としてとらえている。そして、先述の通り、教員養成系学生のうち「否定」タイプに属する大学生は、教職という特定の職業の選択が不本意であることに加え、卒業後の進路の選択肢が限られていることから、今後の進路に関して否定的であり、将来に不安を抱えていると考えられる。よって、非教員養成系学生と比較して、教員養成系学生が大学受験を否定的にとらえている場合、将来の目標を明確にすることやそれに向けて計画を立てることに自己効力感を持つことが困難であると考えられる。

一方、「大学受験軽視」タイプについて、双方の大学生で「わりきり態度」のみが標準より高く、他の下位尺度が低いという特徴を有している。しかし、Table 1より、キャリア選択自己効力感の下位尺度との間に、教員養成系学生では、大学受験のとらえ方の肯定的な側面が正の相関関係を、否定的な側面が負の相関関係を示していることに対し、非教員養成系学生では、肯定的な側面のみが正の相関関係を示している。この点について、教員養成系学生とは異なり、非教員養成系学生の場合、特定の職業に就くことを目的として大学に進学した大学生が少ないと想定され、今後の大学生活の中で特定の将来の目標を持つことが重要であると考えられる。よって、非教員養成系学生では、大学受験に否定的にとらわれているか否かよりも、大学受験を自分の現在の生活や未来につながる有意な経験として肯定的にとらえられるか否かが、将来の目標を明確にすることやそれに向けて計画を立てることにする自己効力感を形成するうえで重要であると考えられる。したがって、非教員養成系学生の中でも、そのような肯定的にとらえ方ができない「大学受験軽視」タイプの「目標選択」と「計画立案」が低かったと推察される。

以上より、大学受験を肯定的にとらえている大学生は、教員養成系大学に所属する場合、大学受験を否定的にとらえている大学生や大学受験のとらえ方に葛藤が見られる大学生よりも、非教員養成系大学に所属する場合、大学受験を軽視してとらえている大学生よりも、一部のキャリア選択自己効力感が高いことが明らかになった。安達(2006)やChartrand & Rose(1996)、廣瀬(1998)は、過去の経験をとらえ直すことや視点を変えて見直す作業が自己効力感の改善や向上に寄与すると論じている。これらの論述も踏まえると、所属先が非教員養成系大学の場合、大学受験を無

意味な経験として軽視している大学生に対し、大学受験についての振り返りや省察を促すことでその経験から気づきを得て、今後の大学生活や目標とつなげられるように働きかけることによって(堀井, 2017)、大学受験を肯定的な方向にとらえ直すように支援することが必要であろう。一方、所属先が教員養成系大学の場合、大学受験を否定的にとらえている大学生や大学受験のとらえ方に葛藤が見られる大学生に対し、教職という特定の職業を選択したことに否定的にとられず、今後、教職以外の進路の選択肢にも視野を広げられるような支援が必要であろう。その際、教員養成課程のカリキュラムの中での学びが汎用的な知識やスキルにつながり、他の進路にも活かすことが可能であるという自覚を促すことも有効であるかもしれない。このような支援により、大学進学時点で教職という特定の職業の選択と密接に関係する大学受験の経験に否定的にとられず、その経験が自分の今後の進路にとって有意義であったととらえられるようになると考えられる。以上の働きかけや支援により、教員養成系学生と非教員養成系学生における、将来の目標の明確化や、それに向けた計画立案や粘り強い努力に関する自己効力感の改善や向上につながると考えられる。よって、教員養成系大学のような目的養成系大学に所属する大学生と非目的養成系大学に所属する大学生の双方のキャリア形成において、大学受験の肯定的なとらえ直しが重要であることが示唆された。

本研究の限界と今後の課題

最後に、本研究の限界として、以下の2点が挙げられる。

第1に、本研究では、大学受験期の努力の程度のキャリア選択自己効力感に対する影響を統制していない点が挙げられる。非教員養成系学生ではそのデータを収集しなかったものの、堀井(2017)では、大学受験のとらえ方に加え、大学受験期の努力の程度も独立変数に含まれており、大学受験期の努力の程度がキャリア選択自己効力感に一定の効果を示す可能性も否定できない。今後、大学受験期の努力の程度のキャリア選択自己効力感に対する影響を統制することにより、大学受験のとらえ方のキャリア選択自己効力感に対する影響をより強調して示すことができると考えられる。

第2に、1時点での調査であるため、大学受験のとらえ直しによってキャリア選択自己効力感が変化するという因果関係にまで言及できなかった点が挙げられる。今後、縦断的調査によって、大学受験のとらえ直しのキャリア選択自己効力感に対する効果を検証し、因果関係に迫る必要がある。

【引用文献】

- 安達 智子 (2001) . 大学生の進路発達過程——社会・認知的進路理論からの検討—— 教育心理学研究, 49, 326-336.
- 安達 智子 (2006) . 大学生の仕事活動に対する自己効力の規定要因 キャリア教育研究, 24, 1-10.
- Bandura, A. (1995). *Self-efficacy in changing societies*. New York: Cambridge University Press. (バンデューラ, A. 本明 寛・野口 京子 (監訳) (1997) . 激動社会の中の自己効力 金子書房)
- Chartrand, J. M., & Rose, M. L., (1996). Career interventions for at-risk populations: Incorporating social cognitive influences. *The Career Development Quarterly*, 44, 341-353.
- 古市 裕一 (1995) . 青年の職業忌避の傾向とその関連要因についての検討 進路指導研究, 16, 16-22.
- 花井 洋子 (2008) . キャリア選択自己効力感尺度の構成 関西大学大学院人間科学, 69, 41-60.
- 廣瀬 英子 (1998) . 進路に関する自己効力研究の発展と課題 教育心理学研究, 46, 343-355.
- 堀井 順平 (2017) . 大学受験のとらえ方およびコピーングの組み合わせによる自己効力感の差異——特性的自己効力感とキャリア選択自己効力感に着目して—— 発達心理学研究, 28, 233-243.
- 堀井 順平 (2019) . 個人属性と大学受験期の努力の程度による大学受験のとらえ方の違い 広島大学大学院教育学研究科紀要第一部 (学習開発関連領域), 68, 41-48.
- 石川 茜恵 (2013) . 青年期における過去のとらえ方の構造——過去のとらえ方尺度の作成と妥当性の検討—— 青年心理学研究, 24, 165-181.
- 石川 茜恵 (2014) . 青年期における過去のとらえ方タイプから見た目標意識の特徴：時間的展望における過去・現在・未来の関連 発達心理学研究, 25, 142-150.
- 中島 由佳 (2012) . 大学受験および就職活動におけるコントロール方略の働き 風間書房
- Taylor, K. M., & Betz, N. E. (1983). Applications of self-efficacy theory to the understanding and treatment of career indecision. *Journal of Vocational Behavior*, 22, 63-81.
- 若松 養亮 (2012) . 教員養成学部生における教職志望の変動要因 滋賀大学教育学部紀要, 62, 87-97.